

## 原 著 (第17回徳島医学会賞受賞論文)

### 当産婦人科クリニックから見た思春期の性の現状

河 野 美 香

河野美香レディースクリニック

(平成18年11月6日受付)

(平成18年11月30日受理)

平成13年9月1日~平成17年12月31日までに当クリニックを受診した15~19歳の患者, 1,600人の受診理由を分析し, 若者の現状を把握するとともに, その結果を検討し, 10代の性のトラブルを少なくするべく, 考察を加えた。

1. 該当患者は当クリニックの全患者数の約5%である。
2. 約40%は妊娠, 性感染症, 膣炎・骨盤腹膜炎などで, 性行為が前提となっている。
3. 月経異常の15.5%がダイエットのため, 無月経になっている。
4. 妊娠に関しては65.8%が人工妊娠中絶術を受けており, 19.5%は出産をしている。
5. 出産例の9割以上は妊娠12週未満の初診であり, 早くから出産を決意している。
6. 性感染症はクラミジア感染症が全体の35.5%である。

望まない妊娠や性感染症罹患の減少をめざすには, 医療現場, 教育現場, 家庭, 自治体などの間でのネットワーク作り, それぞれの場における対策作り, また青少年に向けては, 性教育, 性感染症教育の充実などが必要と考える。

今, 思春期の子供たちの間では, 不登校, 暴力, 自殺, 人工妊娠中絶や性感染症の増加, 喫煙, 飲酒, 過剰なダイエットなど, いろいろな事柄がおきている。

この中でも, 性に関連するトラブルは予想外に多く, 現場で働くわれわれも非常に憂慮している。実際, 当クリニックでも10代後半の患者は, 年に400人から500人も受診しており, その4割は性行為の延長線上に発生した疾患や妊娠を抱えている。

安易にセックスに走る若者の背景にあるものは, まず溢れんばかりの性情報がある。携帯電話やパソコン, ビデオ, 雑誌などから一方的に入ってくる情報は, 決して好ましいとは言えないものも多い。それらに長期間, さらにされ続けている彼らは, 安易にセックスすることに

対して著しく抵抗感が減少している。高校生3年生の初交経験率は1987年に比べ, 2002年では, 男子の27.7%が37.3%に, 女子では18.5%が45.6%と上昇しているのもそのひとつの表れといえる<sup>1)</sup>。また一方で避妊や性感染症の知識は充分とはいえず, そうなると当然, 中絶や性感染症罹患の増加は避けられない。自分の体や命を大切に。相手を思いやる。エチケット, マナーを守るなど社会で生きていくうえで, 学んで欲しいことはたくさんあるが, その上で, 環境の整備や性教育など, 周りの大人たちの努力は欠かせない。

今回は, 当クリニックでの青少年の現実を調査するとともに, 医療側からできる対策を検討した。

#### 対 象

平成13年9月1日から平成17年12月31日までに受診した15~19歳, 1,600人(1677回の受診回数)を対象とし, 年度別受診者数, 受診の理由, それぞれの理由に対しての, 詳細を調査した。

#### 結 果

1. 年度別患者数は平成13年, 95人, 全患者数の5%(4ヵ月分), 平成14年, 328人, 3.3%, 平成15年, 372人, 4.2%, 平成16年, 372人, 4.3%, 平成17年, 510人, 5.9%と推移している。平成17年の患者数増加に関しては今後の増加傾向を示しているのか, 単年度のみであるのかは, さらに次年度を調査しないと決定的なことは言えない。また18歳, 19歳が全体のほぼ半数を占めている(表1)。
2. 受診の理由は月経異常が723人(全体の43.1%)で, このうち15.5%が痩せによる無月経である。149人

(全体の8.9%)が妊娠でこのうち65.8%が人工妊娠中絶を受けている。331人(19.7%)が性感染症で、そのうちの35.5%がクラミジア感染症である。その他の膣炎、腹膜炎は147人(8.8%)、乳房や性器の形についての診察や月経周期の調整など、その他の理由での受診は327人(19.5%)であった(図1)。

3. 月経異常の中では33.4%は月経の周期の異常(頻発月経や稀発月経, 不整周期), 15.5%は体重減少による続発性無月経, また月経困難症は月経異常の32.6%を占めた。その他は過激なスポーツ, 肥満, ストレスなどによる続発性無月経や, 不正出血, PMS(月経前症候群), 原発性無月経などであった。
4. 149例の妊娠のその後は, 65.8%が人工妊娠中絶を受け, 出産は19.5%, 流産は2.7%, その後の経過が不明なものは12.1%であった(図2)。
5. 15~19歳までの人工妊娠中絶は全体の10.9~15.1%であった(表2)。

6. 出産例30例のうち, 初診時の週数が12週を超えているものは2例しかなく, ほとんどが妊娠初期から出産を希望し, 受診していた(表3)。
7. 妊娠例の年齢別は15歳, 6.9%, 16歳, 6.9%, 17歳,

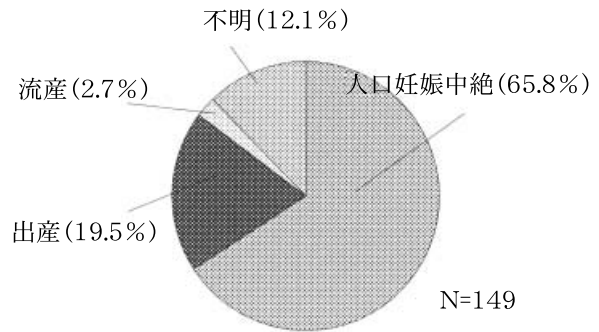


図2 10代の妊娠とその後

表1 年度別の患者数

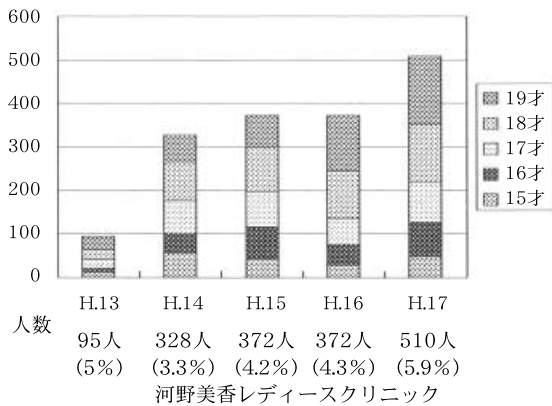


表2 クリニックでの人工妊娠中絶

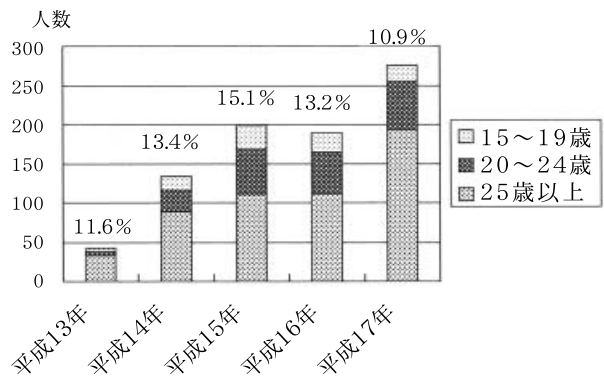


表3 出産例の分析

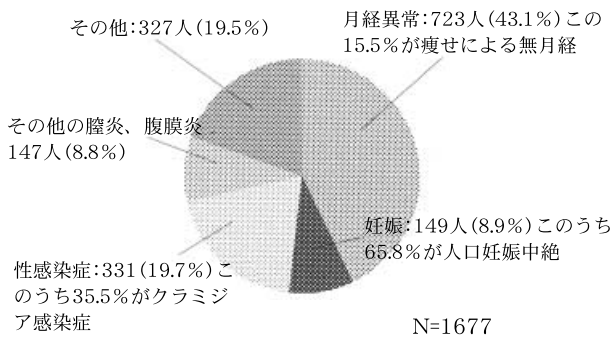
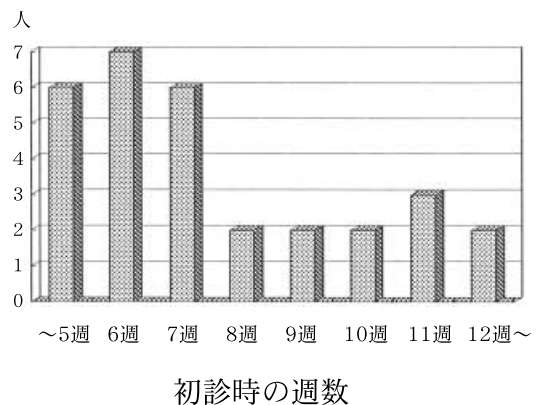
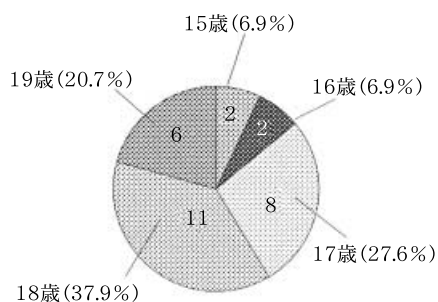


図1 受診の理由

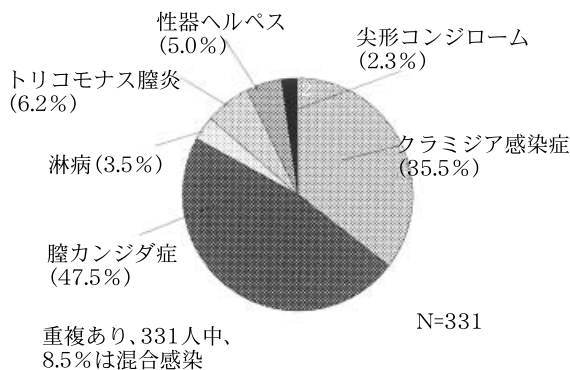
27.6%, 18歳, 37.9%, 19歳, 20.7%で17~19歳が86.2%を占めた(図3)。

8. 異常な分泌物, 下腹部痛, かゆみの症状のあるもの, またパートナーがSTDであるという患者に性感染症の検査を行った。分泌物や下腹部痛のあるものにはクラミジア(核酸増幅法)と淋菌(核酸増幅法), 泡沫状の分泌物を認めるものはトリコモナス原虫の培養検査, 分泌物とかゆみを訴えるものに対してはカンジダの培養検査を行った。尖圭コンジローマと性器ヘルペスは視診にて診断した。性感染症の331人のうち, クラミジア感染症は35.5%を占めた。膣カンジダ症は47.5%であった。また331人中8.5%に重複感染が見られた(図4)。なお梅毒やエイズを疑わせるような患者は認めなかった。



N=29

図3 出産例の分析



重複あり、331人中、8.5%は混合感染

N=331

図4 性感染症の内訳

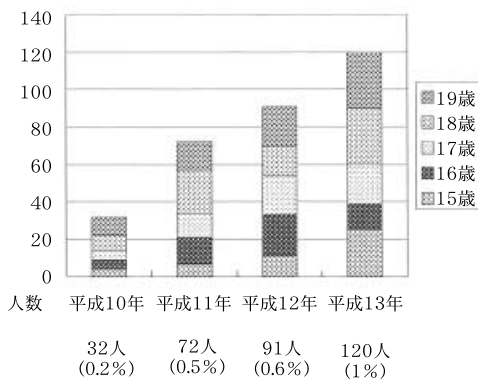
考 察

近年, 10代の受診率の増加は, 顕著であり, 私が以前に勤務していた徳島通信病院でのデータ(表4)でも明らかである。しかし, 平成13年の開業後は年間, 400~500人とほぼ一定であり, 全患者数に占める割合も図1に示すように, 著しく増加したとは言えない。当院では, 現在, ほぼ20人にひとり15~19歳の10代患者ということになる。しかし, 施設によっては, 全患者の16.3%が10代で占められるところもあり, この現実を軽視することはできない<sup>2)</sup>。

当院患者のほぼ4割は妊娠や性感染症, その他の炎症など, 性行為後の受診である。東京都高等学校性教育研究会(2002年)によると高校3年生の初交経験は男子で37.3%, 女子で45.6%となっており, 都市と地方の格差がなくなっている現在では, 軽々しく性行為に移る気持ちを制止させる対策が必要と考える。

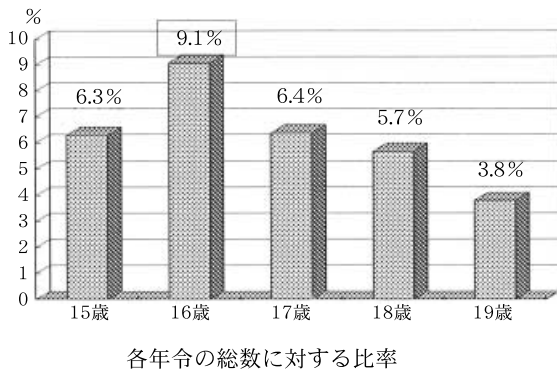
月経異常のなかでも約3割は続発性無月経であるが, 楠原ら<sup>3)</sup>は, 150例の続発性無月経を調査し, その誘因に関して44.7%は誘因がみられず, 誘因が見られた55.3%の半数は体重減少によるものと指摘している。また当院の調査では年齢別にみると, ダイエットによる続発性無月経の占める割合は, 15歳では, 6.3%, 16歳, 9.1%, 17歳, 6.4%, 18歳, 5.7%, 19歳, 3.8%と16歳の高校1, 2年が多く, 痩せてきれいになりたいという意識が強くなってくる時期だと考えられる(表5)。実際, 池田は<sup>4)</sup>中学生になるとだんだん, やせ願望が強くなり, 「やせている方が, かわいい服を着ておしゃれを楽しむことがで

表4 年度別の患者数(徳島通信病院)



第1回徳島性感染症研究会で発表

表5 痩せによる無月経の年齢別頻度



きる」とか「やせれば、男の子とうまくはなしできる」などの意識を持っていると指摘している。

思春期の月経困難症は器質的なものは少なく、ほとんどは機能的なもので、その主たる原因は子宮内膜より産生されるプロスタグランジンである。このプロスタグランジンは、子宮の異常収縮を起こし、その結果、下腹部痛や腰痛を生じさせ、さらに月経随伴症状も引き起こすと考えられている<sup>5)</sup>。しかし、なかには潜在的なクラミジア感染症が月経時の痛みを増強させていることもあり、性行為があって月経痛が増強している場合には性感染症のチェックは必ず行うべきである。

10代の妊娠は経済的に安定していない場合が多く、中絶を選択するケースが多い。厚生労働省の統計では10代の人工妊娠中絶は2001年の13人(対1000人)をピークに、その後、減少しているとは言え、平成17年度でも、依然として、15~19歳女子は1000人のうち、9.4人が人工妊娠中絶を受けている。また妊娠100に対しては64.3%が中絶を行っている。日産婦医会秋田県支部が行った、15歳から19歳までの人工妊娠中絶を受けた65例の調査<sup>6)</sup>では、年齢が若ければ、若いほど、初交から妊娠までが短く、15歳ではほぼ7ヵ月である。パートナーとなる男子は3歳ほど年上が多いという結果であった。妊娠に至るまでの相手の数は7~8人とほぼ同数で、ここでも若いほど短期間でパートナーが替わっていた。

中絶を行った後の影響は、身体的なものより精神的な影響が大きい。人工妊娠中絶率が高い高知県の若年妊娠調査<sup>7)</sup>では、中絶を受けた25%、4人に一人は妊娠を希望していたという意識調査もあり、その子供たちが手術を受けたあとの喪失感が高いと推測され、術後の十分なカウンセリングが望まれる。

当院では出産を選択した割合は、妊娠例の19.5%であった。最近では薬局で妊娠判定試薬を購入できるので、早期からチェックが可能である。以前に考えられていた、妊娠例は初診時期が遅いということは無く、出産を選択した症例の93.1%は、妊娠12週未満の受診であり、早い時期から産む意志を固めていたようである。しかし、未婚、あるいは妊娠後期に結婚した10代の妊娠分娩の問題点は、1. 低出生体重児が多い、2. 周産期死亡が多い、3. 経済的に自立できない、4. 社会的、家庭的援助がない、5. 学業の中断など<sup>8)</sup>があり、多くの問題をかかえる。またできちゃった結婚後、出産、短期間で離婚ということも珍しくない。以前、中学校に性教育に行ったとき、中学二年の女子が、「妊娠すれば、私は産むつもりはあるが・・・。」と、育児を簡単に考えていることに驚愕した。産んで、みんなが不幸になることは絶対に、避けたいことであり、きちんとした性教育が望まれる。

性感染症は性感染症 診断・治療 ガイドライン、2004年の目次に記載されたりリストから、当院で経験したものを検討したが、ほとんどは膣カンジダ症とクラミジア感染症であった。膣カンジダ症は5%ほどしか性交感染しないということもあり、これを除くと、クラミジア感染が大多数を占める。日本性教育協会の「わが国の中学生・高校生・大学生に関する第5回調査報告」<sup>1)</sup>で、性交時に気になることとして、妊娠の可能性をあげているのは、男子高校生、58.6%、男子大学生、64.8%、女子高校生、54.2%、女子大学生、68.8%に対して、エイズや性交感染に対しては男子高校生、24.9%、男子大学生、9.3%、女子高校生、22.6%、女子大学生、34.1%、と妊娠に比べて性感染症についての関心はあまりないようである。

性感染症の特徴としては、女性に罹りやすいことがあげられる。とくに15~19歳までは10万人あたりの年間罹患率は男性の636.2人に対して、女子1,756.9人と2.76倍である<sup>9)</sup>。またエイズやクラミジアなど症状が出にくい性感染症の増加や、性行動が活発な10代から20代に頻度が高いこと、さらにセックスの多様化により、性器外感染、口腔、腸管などへの感染など、様々な特徴を持つ。また薬剤に耐性となった淋菌や癌を誘発するヒトパピローマウイルス、再発を繰り返すヘルペス、性感染症は母子感染するなど多くの問題点が指摘される。

人生これからという10代には絶対、罹患してほしくない病気である。

安易な性交渉が、望まない妊娠や性感染症罹患に結び

ついているのは、はっきりしている。10代の性のトラブルを防止するには、無防備な性行為が何を引き起こすかを認識してもらうことが必要である。そのためには医療機関はもちろんのこと、教育現場、自治体さらに家庭での対策は急務と考える。

それぞれの立場からできることは限られていると思うが、ここでは医療側からできることを提案したい。まず  
1) 現状を知ってもらうこと：学校現場や家庭、社会は身近の10代の現実を正確には把握していない。大変な現状になっているのは、一部の地域でのことで、私たちの周りはそれほどでもないだろうと考えている大人が多い。この現実を伝えることは非常に重要と考える。

2) 10代の青少年と接する場を作る：学校での性教育、保健所でのイベント、自治体が開くイベントなどへ積極的に医療者が参加し、体や病気のことについて教える場を持つことが必要である。

3) 学校医としての仕事の一環：養護教諭とも密に連絡を取り合い、生徒の心身の悩みの解決や定期的な健康管理を行う。

4) ネットワーク作り：青少年を取り巻く、教育現場や家庭、自治体との連携は重要であり、協力しあって彼らをサポートをすることが重要である。

国は2001年4月から「健やか親子21」という国民運動をスタートさせている。その課題のひとつに「思春期の保健対策の強化と健康教育の推進」があげられており、10年間のうちに完結させようと努力中である。現在、ほぼ半分が過ぎ、人工妊娠中絶の軽度の低下などは見られ

ているが、現場で仕事をしている限りでは、目立って改善している印象は少ない。今後は、この国民運動をさらに強固に推進していく必要性を感じている。

(本論文要旨は第233回徳島医学会学術集会において発表した)

## 文 献

1. 日本性教育協会：「わが国の中学生・高校生・大学生に関する第5回調査報告」より
2. 蓮尾 豊：婦人科医が行う性感染症予防教育．教育と医学（慶應義塾大学出版会）632：44 51 2006
3. 楠原浩二，松本和紀，寺島芳樹：思春期の続発性無月経．産と婦 62：37 42,1995
4. 池田かよ子：思春期女子のやせ志向と自尊感情との関連．思春期学 24(3)：473 482
5. 本庄英雄，田中一範：思春期の月経異常 月経困難症．産婦人科の実際 47(11)：1817 1827,1998
6. 後藤 薫：性教育に対する考え方と取り組み：産婦人科の世界 57(1)：49 54 2005
7. 岡田耕輔：高知県における若年妊娠実態調査から考える．思春期学 18(4)：313 317 2000
8. 日本母性保護産婦人科医会：研修ノート No.61 思春期のケア P56より
9. 熊本悦明，塚本泰司，利部輝雄，赤座芝之 他：「日本における性感染症サーベイランス - 2002年度調査報告 - 」。日本性感染症学会誌，15：14 45 2004

## *Present status of sexual behavior among adolescent encountered at my clinic*

*Mika Kawano*

*Kawano Mika Lady's Clinic, Tokushima, Japan*

### SUMMARY

I analyzed the chief complaints of 1,600 young people aged 15 ~ 19 consulting my clinic between September 1, 2001 and December 31, 2005 in order to reduce unwanted pregnancy and sexually transmitted disease in teenagers.

1. These 1,600 patients comprised about 5% of the patient total at my clinic.
2. About 40% of these adolescents were pregnant, had STD (sexually transmitted diseases) vaginal infection or pelvic infection after sexual encounter .
3. The 15.5% of patients with abnormal menstruation had diet-induced amenorrhea .
4. The 65.8% of 149 pregnant patients had artificial abortions and 19.5% delivered.
5. Most (above 90%) of those who delivered consulted my clinic within 12 weeks from 1st date of last menstrual period. These patients decided to continue the pregnancy during the early stages of gestation.
6. The 35.5% of STDs involved Chlamydia infection.

To reduce unwanted pregnancy and STD infection, it is necessary to develop a network among medical institutions, educational institutions, home and community organizations. Moreover, it is important for each of these institutions to prepare a plan to support teenagers. For the younger generation, it appears necessary that adults provide more substantial sexual education and information on STD prevention.

Key words : adolescent sexual behavior, STD, pregnancy